

た。

二十三年十月に入り本当のダメイを知らされ、ナホトカに向かった。しかしこれも信用せず、日本の船に乗って初めて帰国を肌で感じた。苦難の果て、酷寒の地で不帰の客となった戦友の霊安かれと祈る。

## シベリアから北朝鮮へ

愛知県 水野 四郎

大正十三（一九二四）年、名古屋市千種区鍋屋上野町の農家に生まれ育ち、名古屋市立商業学校に入学し、昭和十六（一九四一）年二月に繰上げ卒業をして翌十七年一月に、夢と希望を持って、日本の新天地と言われていた満州国の首都新京（長春）市興安大路に本社のある進和洋行に社員として就職した。当時の満州行きは国を挙げて盛大に送り出していたので、その意気に乗って、家族、親族一同の心温まる送別を受けて名古屋を後にした。勤務地新京市に着任した後、上

司、先輩たちの指導を受けて建設途上の満州国の首都新京市において製材用の鋸のこぎりの販売をする商社で働いた。

昭和二十年現地で徴兵検査を受けて、同年五月二十日、関東軍直轄機動第一旅団第三連隊通信中隊へ現役入隊して、南満州公主嶺にあった部隊に入営した。

昭和二十年七月、訓練期間中にもかかわらず突然移動を命ぜられた。この原隊には再び戻るまいと告げられて公主嶺駅まで赴くと、行き先も告げられず貨車の中へ押し込まれた。そうして第一期検閲が繰り上げられた形でやがて戦場となるソ連国境の近くへと運ばれて行った。着いた所は北朝鮮に近い凶トドロ們的奥地に入った山間部であった。そうして作業は陣地構築と弾薬類の運搬であった。

そのうちに七月十五日頃から体調を崩して練兵休を繰り返している間に終戦となり、武装解除された。第三軍司令部のあった延吉がこの地域の日本軍の武装解除された将兵の集合地であって、同地に集まった将兵を約千人を一個大隊に編成して、徒歩で琿春を経由し

て約十日位歩かされてソ連領のポセツト灣を望むことのできるクラスキーノに集めて、日本軍の將兵に、ここから日本に帰す予定であつたが、ポセツト灣は港が小さいため大きな船が入れないから汽車で大きな港まで移動させて船に乗せて日本に帰す、と言うのでその言葉を信じていた。クラスキーノまで原隊の者と同一行動をとつてきたが、体調が悪いということで一人他の部隊に編入させられ、原隊の戦友たちと別れた。

昭和二十年十月頃に、新たに編成された大隊の一員として貨車に詰め込まれて、ハバロフスクからコムソモリスク經由でムーリーに約五日間位かかつて到着してこの地域の収容所に収容された。この地域はエトロフ方面から連行された部隊員で北海道出身者が多かった。収容所の施設は最悪な状態で、電灯はなく、暖房もストーブがあるだけでシベリア抑留初めての越冬は死にもぐるいの生活であつて、一言で言えば地獄そのものであつた。この苦境の中で弱い体がさらに悪くなり、働くこともできない状態になつた。この頃、この地域では病人が増え、死者も多数出るため、昭和二十

十一年四月頃から病人及び体調の悪い者を集めて貨車でコムソモリスクからハバロフスク經由でウラジオオストックからクラスキーノに至つた。この頃のクラスキーノの状況は、北方行きの貨車は満州から持つて来た機械類をはじめありとあらゆる物品を積載していた。私たちが琿春<sup>コシヤン</sup>經由でこの地に連行されて集結した地点は、幕舎が散見されたが、人影は余り見かけなかった。

このクラスキーノから時間をかけて北朝鮮に入り、清津<sup>サイジン</sup>、茂山<sup>モウサン</sup>、富寧<sup>フクネイ</sup>と移動して、昭和二十一年八月頃に日本窒素工場のあつた興南に行き、この地の興南収容所に収容された。

収容者のほとんどは病弱者であつたため作業らしい作業はなく、浴場用の薪運搬、掃除作業等の軽作業であつた。食事は少量の雑穀の入つた雑炊と高粱<sup>コウリヤン</sup>パンで、貧しい食事であつた。作業が少ないので碁、将棋、マーじゃん等をして時間をつぶしていた。

収容所は病弱者で充満していたが、健康を取り戻した者は知らぬ間にどこかへ連行されて行つたが、話に

よれば再びソ連領に連行されて抑留されたということであった。

昭和二十二年二月頃、元山に集合させられて船に乗せられ移動を始めたが、最初はどこへ行くのか全く分からず、またシベリアでも連行されると思っっている間に船は佐世保に到着していた。この船は栄豊丸であったことは後から分かった。

夢にまで見た日本に生きて帰れることができた。抑留期間中に死ぬかと思っただことが幾度かあった。ある時、もうだめだ、死ぬかもしれないような状態になった時、昭和十七年一月日本を出て満州の新京に赴任するとき母が渡してくれた新勝山成田神宮のお守りを肌身離さず持っていたが、この成田山のお守りの木札を取り出して切り崩して数回に分けて飲んだところ、死期を退けることができた。お札を持たせてくれた母の力と成田山のご加護で助かり日本に帰れたのは、言葉、文章等では表現できない喜びであった。

## 抑留記

愛知県 内藤 朝夫

### 一、出生から入隊

①大正十(一九二一)年一月十九日、朝鮮光州市にて出生。

昭和十三(一九三八)年三月、木浦(モッポ)商業高校を卒業、同年四月南鮮電力(郡山)に勤務。家族は父母と妹だった。

②昭和十七年七月十六日、静岡県浜松航空隊に現役入営、通信班に配属。当時、装備は良好と思われた。

### 二、ソ連軍侵攻前

①昭和十八年二月、当航空隊通信連隊は、中支方面の南京、漢口、徐州各地を転戦する。空中勤務者には特攻任務も課せられた。行き先は特攻基地知覧ではなかったかと思う。